歌合 ◦建暦三年七月十三日 同九月十九日

[illegible]　[illegible]三年七月十二日

[illegible]　[illegible]　山鹿[illegible]

[illegible]

九

[illegible]

[illegible]藤原朝臣[illegible]

[illegible]正二位[illegible]傳奉

從四位上行播磨守藤原朝臣[illegible]

正三位下行[illegible]時[illegible]

歌合

建暦三年七月十三日

題

野月　山鹿　暮恋

作者

左

右

正四位下行左近衛権中将藤原朝臣經通

散位正四位下藤原朝臣保季

従四位上行播磨守藤原朝臣範基

正五位下行左近衛権少将兼近江権介藤原朝臣為家

久曾神藏書

正三位上行左京権大夫藤原朝臣永光

右

従三位藤原朝臣家衡

正四位下行左近衛権中将藤原朝臣忠定

従四位上行丹後守藤原朝臣範宗　本

従五位上行侍従藤原朝臣光家

正六位上行左衛門権少尉藤原朝臣康光

皇太后宮大夫俊成卿女

衆議判

一番　　郊月

左　勝　　女房

武蔵野の末の野もなや月かけの心はてなき秋風そ吹

右　　俊成卿女

をきつゆや雲ゐにかはる草の原すむ月はなを秋の野の露

二番

左　勝　　源通光朝臣

幸ひとるもさのまゝおもひつゝ月まちわひくあか月のゆきの月

右

露はらふ人もなき野にまたとへて月影やとる宮城野の原

三番

左　持　　維基朝臣

みかきもり野への浅茅にあさきよりかけて月の霜やおきけむ

右　　家衡

まくらにはとゆかす忍の命ををしつゝ月のかけそよく秋風

四番

左　　範基朝臣

むらさきの萩の下葉の露なれとにほひかはらてやとる月かけ

右　勝

盛しのゝきはもゝとよもの月ひく草の葉末の白露

五番

左　勝　　為家

野への花いろ〳〵にこそまとはれなるき霧たちこめぬ秋の萩はら

右

ゆく人の袖にも露やおきぬらん月影とまりかねつゝ

六番

左　持　　藤原永光

こよひまて所に人もいひて家月影もむさしのゝ原

右　　菅原康光

秋の野の露にも移やまよふらんをしかのすてる月影

七番　　正雅

左　勝　　女房

高まの山ゝはなれてみゆる秋風に雲をあらしのはらふ月影

右　　忠定朝臣

ちりぬへき秋の山への錦もてゆふ日ふかくもあかぬ空かな

八番

左　持　　源通朝臣

さ衣のかりほの山の端の夜はなかきにをく露の袖に秋風

右　　家衡

ちりてもゆきかふ草葉にかよふ雲あらしの麻山のさとの秋風

九番

左　持　　保季朝臣

足曳の山のはにかゝる雲わか身とふかく思へはこそ

右　　範宗朝臣

こがらしよしかの木のはゝつきさけれ名のみむさしのかれ野ならでも

十番

左　勝　範宗朝臣

さほしかをなく草かりにたちそめて山かけは霧こめてつゝ

右　藤原康光

秋なるに山のいほりの袖ゆふへつれなきかならすおとつれる色

十一番

左　持　知家

これらしも山のあはれはなくしかの雲かゝるはなくしかれねかほのきこえすさひしき

右　俊成卿女

月かけをこゝろのあとにかけとめてゆふへは秋のさひしさを麻の袖の

十二番

左　勝　藤原康光

庵ちかく山のこのはをちりしより鹿のねちかくなれしかたなきにし

右　光家

をしかつまこふる山のの嵐風にかきたてゝ庵ちかくきこえん

十三番

左　持　女房

つゆはらふ袖のみしるや秋の夕心のすゑにかなしかるらん

右　　　　光家

本ノマヽ
まはらにつきし心の秋のゆふべとなりぬともふかき哀は

十四番

左　持　　　　隆道朝臣

たちまよふ神のみるれもなき秋風さそきの夕暮

右　　　　俊成女

ありし人になれしなかはそれとなくまたさそはれに秋の露さそ

十五番

左　　　　保季朝臣

萩の上に風のふくらむ夕くれはなかめにまさる秋の露けき

右　勝　　　　藤原康光

三日月のひかりもとのこころもゆくつき秋のゆふくれ

十六番

左　持　　　　範宗朝臣

秋ふかき住むものかな思ひしる心のうちに秋の夕暮

右　　　　家衡

かすみたつ夜半のむしき秋風にひとりかなしき心のうちの

十七番

左　持　　　　　　御製

こけハまきつふかき渡袖のわれ五申くすらん松の下も

本ノマヽ

右　　　　　　　　範宗朝臣

十八番

左　勝　　　　　　藤原朝光

はしらあれハ松もひくつる（え）まてよそにあかき萩の花

右　　　　　　　　忠定朝臣

吹をかゝるなむ露風ちらもおもひつる秋の下ひも

右哥合新写一校了他以異本
一而校
安永八己亥之年正月吉日　里居

十巻　建暦　内ゝゝ之

哥合　建暦三年九月十九日

題　深山月　寒野虫　寄風雑

作者

左

女房　勝之

有家朝臣　勝之

家衡朝臣　持之

家隆朝臣　負持勝

雅経朝臣　負之

定家朝臣　負之

経通朝臣　持之

俊成卿女　負勝持

範宗　勝二　持一
行能　負勝　持
判者
侍従左京朝臣定家

為家朝臣　負二　持一
光家　勝負　持

一番　深山月

左勝　女房

月のすむ山風さむしみなせかはおとさへまさるや人もすむらん

右　雅経朝臣

何ゆゑにこゝろをさそふ山風の秋の夜の月

左の哥ことはつゝき絶妙之上可謂幽玄

右の哥もすかたよろしく聞え侍るを

さきのきはにはてに深山とおきてまた

初の句にあらぬ心をつゝけたる山の

こゝろも聞え侍らぬにより左勝

二番

左 勝　　有家

秋の夜を月にはつかまてみ山のふもとみえし

右　　定家

こゝろの露さへ心も道あれは秋の葉まさもほのかなる

左右各見えしに心をとりて心をはなれとも

すこしは心にかなひ侍らぬにも右の歌の露

さそふ山はこそかなしきことゝも侍らねは

ことにつけて心の中にそはる

やまのあらしは月のはてにのみおもかけそ

もとかの月のきこえしと思ひなかにの紫

ことは思ひまさりて侍るへきにや以左為勝

三番

左 持　　家衡朝臣

てのつきゆかしきこゝろをまてとは思ふ月なきかなしかつは見し

右　　経通朝臣

かつ見つゝしらね月と秋をへてみすれはさとることもの露

左もとふつゝく心の中にそほけれ

なにかなやあはれしきこゝろ侍るさゆら

ひさしきをまてとゆるしてよるはるかの侍るやうに

千載
ちる月のし

後頼朝臣家にて月の歌よみ侍けるに
ちとせふるかつらきの山の谷川にあらはれちりて

王二集
影かはるこゝろの
顕輔朝臣
影かはるいまやこよひの月なれやしら雲のかゝるやまのは又晴ぬらん
かへるのこほりやまてゝいさやこのよにくまのいつくしき山かけ月まてちりし
まちとほきこよひの月は

四番

王二中
左 勝
家隆朝臣
月影はすめばすむほど雲の上の深き夜すくる羅衣

右
家集
後徳殿御歌
秋の夜の影もさやけき月は雲まちの深きをいてゝ月はさやかに
夜は
月とあらはれてなかめしてちりの空にはてまつ月のさそ
すみのほるみちにそをこゝろ間にはまくらに
ふけゆくほとは左勝ならむ

五番
左
範宗朝臣

勝
わしてなかめのあけまつ月とおもふにはなれにけり

右
為家

志ら雲のかゝるおほえぬ山はたえて人の秋にかはりぬる
たちかへり何思ふらん右秋の月にほのかに
むかしの雲のかゝりたるにやとおもひて
きこゆるには以左為勝

六番

左　　　行能

君か代をそらにしるしの松かえの千代のみとりの流をそまさる

右　勝　　　光家

わか君のためのつきせぬ山に雲まよひてなかきよかけの月さえまさるらん（ひと）

左歌君か代といふよりも千世とも八千世もきこえし

何ゆへ桜とこのもしきに只今まうし
こゝろにふかゝや何人又松の梅つくる
常にいのりそへきてまにまに何花の光
にしといひすへて何つしかつきけり
わすれむつかしき物をも見て何ゆへ
見よせられてもまさりけるにいさゝか勝
何事もや以右為勝

七番

左　勝　　　家隆

右　　　御製　（順徳院　新拾）

（新拾秋下）
わきもこやとこは萬葉のきらひてすなほにねてをる世への初しも

右　　　　　雅経朝臣

きりぎりすかくても秋の夜半の月浅茅が原にしのぶらん

左の歌は、萩の葉しもあきて明け方の

以下、秋の露の色を見せ侍りてすこしく

わりなくこそきこえて侍るを、右はすこし

こしをれ侍る、すゑ侍りつるを

露のゆきき秋まちの山風のこゑは、立田の

みかきになして、はげしき心も侍るを、

よきとも申がたくも侍るにや

侍るべしとて、左勝

壬二集

露のゆきき秋まちの山風

八番

左勝　　　　大蔵卿

すゑにてや穂むきの風よ秋かけてはらふ浅茅の露をみだすと

右　　　　　侍従

枯れぬ秋のすゑの末かぜ身にしむは虫の音

かな秋のすゑの思ひのおもかげしのばん言葉

の露しもとふとなく末の葉でしも

なびきたつけしき侍らぬもこそ

ともかくも申すがたきをこそ

明け侍らんこともかなふ風情つきなく

白露とみゆるはかりのゆふへかな
こそ侍れハ心左為勝

九番

左 持 従三位

なかの松と思ひむしのねもきゝすかりの葉に露ふかくなりて

右 経通朝臣

よしなくは露にぬれつゝ浮きとのむしのこゑ霜のかゝるも

左もことのほかの心も見えすへにまかせ

何れも侍れとも一ことやまとにもかへ

侍るへきかはしらすや侍らん

十番

左 家隆朝臣

野ハかれのゝむし鳴ねむ秋霧にしたゝみさへ

右 勝 俊成卿女

うらむへき今はあらしとまた野の露にもまかせ

むしのねむもしも心にたえぬ

よしなき事はしくは侍るに

事に思ふ程も心のやかての

みにも心もちてや侍る

おほくのすゝきのこと葉は心にもかな

きこえ行あし題の心たいうかはれきぬ
流きくうちとよしつるを

十一番

左 勝　範宗朝臣
色月も心の東の空よりもしるく行ますらむ皆のなる

右　為家
初しもの置きにしおきのはかれ枯しも露のいろまさる
左 奇心こそのもとよ行しつる行
のなるもとそきしいつらきて
のうれ思ひしよき行まとそ初しも乃

新千載集 初しもの置きにしはかれ色かはるかなしみの出入る

十二番

左　行能
虫の音の浦の流ばをたか風そよの間よ霧はまもむ人乃移る

右 勝　家隆
まむしき思いとるもまもまの小さき小夜の風
むしの思よまのしもはかとも七番のた
音おもかし心よ行へしまむし乃
うらことにめつれしうるそ行れは流き花

前よ書き勅集り了とて新しきに小虫の音はれむしとおもりまうす

此代ニ読て侍れは勝侍るへし

十三番　寄風雑

左勝　　女房

茂るへり川のほりのせの紅葉は流ちりなむけとも風に海まて

右　　雅経朝臣

袖の上の月の夕のも外と乃荒れても見るゝ外け秋風の身に

左心すゝいとまれしくも侍るを秋乃台

みゆるしきさても侍らん右寄れ

すますもゆかしき心も侍ちまかせて侍るもそうにて縁

此こ乃も猶も見るゆうけ三句に読み侍りて

不計は外にうまえは此ゆゑよりてそり

やゝうらて侍らん左歌とかくまれにし空

三句かすけ詞よとおもいわくらしき哥の心

いゝそくゆらこそやうゆうきて是定中者

侍りき持ほそ右勝

十四番

左　　　大蔵卿

長月のかけさゝ露のすゝ夜の小松陰の浦と秋風そ吹く

右　　侍従

うゝしら川今はかけこし秋風の色はなさつゝよ結ぶ紀

左 かさゝきの雲ゐにまよふかの月をこそ見は
心あることのはにしもそむけはことはりしく
侍らんに右はつよふかきいつかなしかるし
見るほとはふかゝるこゝろのまさるへし
侍らはゝ返しに左の勝

十五番

左 従三位

秋の夜はくもゐにみゆる霧の露の露きぬとはいかにゝと

右 経通朝臣

いくちよもかはらぬ秋のさやけさに雲ゐるかのへ経るよ

経縁のたまの秋のいくよ経ぬれはまなるの
きぬたゝおとたしかにかはるいくよそなれ
ことゝりまさきにえらぬ侍らぬまゝ

十六番

左お 家隆朝臣

主二下

あはれむ君をたゝかの風の絶すかなよかの雲居

と ん

右 従三位源女

家集右

なかなか風にまことまさき露かゝるいつくの松の雲こそ風を

脱字

いかなる勝なるへしき判にも侍へし

十七番

左 持　範宗朝臣

春人はつゝむの袖に梅の花さくらに匂はまし

右　為家

山路行かよひし梅の花の袖にこそなかれ匂ひし
けさ雪も移りはて月の暗き又しらさ
たつ春の匂ひとも色を待らん

十八番

左 持　行能

風吹は梅の立枝の春人は花を咲せん人をもあまた待らん

右　光家

梅の香をさそふ花ころわけて此の程にかけるみなかはの流の梅の匂ひ
鳥の声の色の花もあやなくや心又おはし
さ夜ふかく見る花をもおもひて見るきみらん
やまさくや待らん

116x
647
17
6